

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	2003年熊本大学ハーン展示会・講演会のこと
Author(s)	西川, 盛雄
Citation	東光原 : 熊本大学附属図書館報 = Kumamoto University Library bulletin, 38: 3-4
Issue date	2004-01
Type	Others
URL	http://hdl.handle.net/2298/10360
Right	

2003年熊本大学ハーン展示会・講演会のこと

西川盛雄

平成15年(2003年)10月17日(金)から24日(金)まで熊本大学附属図書館で「ラフカディオ・ハーン展示会・講演会」を行った。附属図書館が主催し、熊本大学小泉八雲研究会が参画・協力した。これは昨年が続いての催しである。そして今年もまたさらに充実・発展させてこれを継続して行う予定である。というのは平成16年度(2004年)はラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が東京新宿の西大久保で亡くなってから丁度100年の節目の年を迎え、国際的な視野で様々な記念行事が予定されているのである。その思いは、没後100年ということ、2003年度はいわば2004年度に向けたホップ、ステップ、ジャンプのステップに当たる年として重要な意味を持っているのである。

オープニングの17日には熊本アイルランド協会を通してアイルランド駐日大使のポドリグ・マーフィー氏が来学し、熊本大学にアイルランド関係の学術図書43冊を贈られた。これに際して大使はこの日から始まった本学の「ハーン展示会」を見学され、説明を受けられた。

その後、文学部の里見繁美教授の「ジャーナリストとしてのハーン」の講演があり、最終日の24日には文学部の福澤清教授による「ハーンの異文化理解と言語観」の講演で締めくくった。展示の準備には学生も含め関係各位の多大な協力があった。この場を借りて感謝申しあげたい。「展示会、講演会」には本学教職員、学生に加えて一般市民の方々の参加も多数あり、充実したものとなった。

展示品目は多岐にわたる。本学五高記念館から借用したハーン直筆の試験問題、シンシナティとニューオリオンズそれぞれの町についてのハーン滞在当時(1880年)の古地図(複製)、当時の五高生たちの学生生活を物語る多くのパネル写真、嘉

納治五郎先生を加藤神社で送別した時の集合写真(ここには嘉納先生、ハーンに加えて秋月胤永先生の姿もある)、さらに公文書関係の資料のオリジナルや写しも展示された。

附属図書館からはハーン著書の貴重な初版本の数々、ハーンの肖像掛け軸、ハーンが勤務していた「シンシナティ・インクワイアラー」紙と「シンシナティ・コマーシャル」紙のうちハーンが実際に書いた記事が載っている当時の新聞のオリジナル(これは実業家の檜山茂氏から三年前に熊本大学に寄贈を受けたものである)、さらにこれまで『東光原』に書いてきた熊本大学小泉八雲研究会のメンバーによる執筆文の拡大パネルなどが展示され、さらに会場ではコンピューターを通してハーン関係資料の検索の便を図るようにしていただいた。

日本在住の14年間にハーンは松江—熊本—神戸—東京(新宿)と転居したが、これは期せずして自然が豊かに残り、旧き良き日本の伝統の守られているところから少しづつ守られなくなりつつあるところ(都市部)への旅であった。加えて東京在住時は明治30年から亡くなる明治37年まで幾度も静岡県焼津の海辺近くの山口乙吉の家を訪ねている。海が好きで水泳が得意だったハーンには焼津の荒海と山口乙吉という人物との出会いは格別なものがあったのである。

明治維新とりわけ西南戦争(明治10年)以降、新政府の方針で日本の近代化・西欧化の波は加速度的に大きくなって行く。結果としてハーンは、都会に行けば行くほどそこは逆説的に彼の素直な心から離れた場所となっていく。そんな中にも西洋人の目で生活体験を通して日本を解釈し、『東の国から』に象徴されるように西洋人であるハーン

が日本人の『心』を欧米に対して英語でもって渾身の力を振り絞って紹介していったことは特筆されていい。

ハーンは明治24年(1891年)11月19日に春日駅(現熊本駅)に到着、時の第三代校長嘉納治五郎の出迎えを受けた。住まいは官舎を避け、熊本市手取本町34番地の赤星晋作氏の家を借りて住んだ。その息子の赤星典太氏はハーンの教え子である。以後明治27年(1894年)10月上旬に再び新聞記者として神戸(神戸クロニクル社)に移るまでの約3年間、第五高等中学校の英語・ラテン語の教師としてここ熊本の地に大きな足跡を残す事になるのである。明治25年(1892年)11月には坪井西堀端町35番地に居を移すことになるが、日本に関する最初の著作『知られぬ日本の面影』を出版し、長男一雄が生まれたのもここ熊本の地であった。また、旅好きであったハーンはここから隠岐、長崎、京都等の旅にも出かけている。

明治23年(1890年)40才で来日したハーンは当時帝国ホテル支配人だったM.マクドナルドや帝国大学博言学(言語学)教授だったB.H.チェンバレン先生の世話で横浜から松江(尋常中学)に英語教師として赴任した。

松江では武家の伝統を受け継ぐ小泉節と結婚、ここでさまざまな興味深い民話や説話に触れ、いたく興味をもつようになる。神話(杵築や出雲大社)と水(宍道湖)のある風景のなかでハーンはギリシャとギリシャに繋がる母(ローザ・カシマチ)のことやアイルランドのトレモア(ウオーターフォード州)の海岸や妖精たちの不思議な世界を思い描いていたにちがいない。

熊本には松江に一年間いた後にやって来たが、後に在熊中の経験に基づいて多くの優れた作品を残している。三角半島を舞台に長崎から熊本に帰る時の旅先の佳品『夏の日』、上熊本駅(当時は池田駅)を舞台に殺人犯が護送されてきて、自らの手で殺した警官の未亡人とその子供と対面す

るという緊迫した場面を見事に描き出した『停車場で』、第五高等中学校を舞台にして描いた『柔術』や『九州の学生とともに』、五高裏の黒髪村の高台にある鼻が少し欠けた石仏のことを描きながら仏教の内奥について考察する『石仏』、日清戦争を背景に教え子の出兵に際してハーンがこの教え子と人間の霊魂について西洋の解釈と日本の仏教的解釈を対比させる『願望成就』、薩軍と官軍が死闘を演じた西南戦争を歴史的背景としてくり上げられる車屋平七とハーンの緊迫した対話で構成される『橋の上』など、特筆すべき作品はすこぶる多い。

2003年度はアイルランド駐日大使の来学という思いがけなくも幸運な形で「ラフカディオ・ハーン展示会・講演会」の二年目のステップを迎え、これを無事終える事ができた。2004年度はジャンプの年である。これを節目に熊本大学におけるハーン(と漱石)の存在の大きさを確認し、この芽を何とか研究と教育の両面において大きく育てていきたいものである。2004年度の「展示会」は熊本大学の大方の理解を得、是非内外に向けて有意義なものにしたいと思っている。そうすることがハーンに少なからざる恩恵を蒙って来た熊本大学がハーンに対して果たすべき私たちの礼儀のような気がするのである。

(にしかわ もりお 教育学部教授)

